

Part 3

教育関係者+企業人
座談会

自ら学びに向かう高校生をいかに育てるか

高校生一人ひとりの心に火をつけ、学びに向かわせるにはどうすべきか。
教育関係者と企業人が教育現場と実社会をクロスさせながら、高校教育の今とこれからを語り合う。



意欲に関する課題の所在

山河 皆さん、本日はよろしくお願いたします。

本日の大きなテーマとして、生徒の「意欲」を取り上げたいと思います。現在、毎年約100万人いる高校卒業者の7割以上が進学し、少子化の影響もあり、「全入」状態の大学が増えていきます。ところが、学びの機会が保障されるほど、「なぜ学ぶ必要があるのか」という生徒からの問いかけが増えている気がします。意欲が低いまま進学して社会に出て、果たして成長し続けられるのかと不

安を感じます。生徒、あるいは若い社会人の意欲に関して課題と思われることを率直にお話いただけますか。

寺島 今の高校教育では、早くから将来の進路や目標を決めるように仕向け過ぎていくことが、逆に可能性を狭めて意欲を失わせる要因になっていると感じます。

石黒 同感です。確かに高校の進路学習では、「どのよう な仕事がしたいか」「どの学部に進むか」など、将来の道筋を見つけるように促します。しかし、自分に向いてい



「天職」を
誤解させない

石黒文雅

る職業が分かる高校生の方がまれです。そうした状態で絞り込むと、受験も含めて失敗が一切許されないという気分になり、少しつまずいただけで「もうだめだ」とあきらめてしまいかねない。これでは、じっくり構えて学ぶ気持ちにはなりません。本当は、多くの出会いを体験し、

失敗しては再チャレンジを繰り返す中で、目標や適性を見つけてもらいたいです。**山河** おっしゃる通り、本来、進路学習は将来の可能性がどんどん広がる「末広がりが望ましい」と思います。しかし現実には、文理選択などによって進路を収束させています。その延長線上にある

参加者

◎教育関係者



福岡県
私立筑陽学園高校
石黒文雅
Ishiguro Fuminasa



山形県教育庁
高校教育課
大沼敏美
Oonuma Toshimi



東京都立西高校
寺島 求
Terashima Moromu

◎企業人



日本通運株式会社
営業企画部
楠本銀次郎
Kuwamoto Gjinjifo



株式会社東芝
社会システム社 企画部
小島和真
Kojima Kazumasa



武田薬品工業株式会社
ヘルステアカンパニー
杉本雅史
Sugimoto Masashi

◎ファシリテーター



株式会社
ベネッセホールディング
教育事業本部
高校教育事業ドメイン
山河健二
Yamakawa Kenji

のか、当社の入社試験の面接では、多くの学生が狭い視野で自分の将来のシナリオを話すのが気に掛かります。

楠本 確かに新入社員の多くが、「この仕事をしたい」という限定的な希望を持っていますが、なかなかその通りにはいきません。会社が本人も気づかない能力を見いだし、異動させることもよくあります。私も人事希望でしたが、ずっと営業職を楽しくやっています。

石黒 どのような環境でも頑張り切れる人が生き残れるのではないかと、私も思います。与えられた条件の中で頑張ってみて、何かを見つけはじめるといえるのではないのでしょうか。高校時代に「これが自分の天職」と誤解させることは避けなくてはなりません。

楠本 生徒の意欲低下は、大人がパワーをなくしていることと関係があると思います。日本の企業はグローバル



そつなく仕事をこなすが、
周囲を巻き込む
力が弱い

杉本雅史

化の波に押されて自信を失

いかけ、政治もぐらついてい
ます。高校生はそうした大人
の不安を敏感に感じ取って
いるはず。企業としても
っと頑張り、常に胸を張って
いなくてはならないと改め
て思います。

大沼 経済のグローバル化
や仕事の高度化が進み、企業
が新入社員に求めるレベル
が上がっている気もします。
その要求が高校現場にも反
映されているのではないで
しょうか。

山河 雇用問題が教育に及
ぼす影響は大きいと思いま
す。とりわけ就職難の近年
は、就職を意識せざるを得な

いのが現状です。

小島 採用の話をしなすと、
私が面接で最も重視するの
は、優秀かどうかではなく、
「一緒に仕事をしたいか」「部
下にしたいか」ということ
です。限られた時間で「何か持
っていきそうか」ということを
感じ取るようにしています。

杉本 その人の良さをいか
に見つけて引き出すかとい
う視点を重視するのは、当社
も同じです。

山河 今の生徒は、一対一の
コミュニケーションに慣れ
過ぎていて印象を受けます。
例えば生徒への講演では、全
体に向けた話を自分のこと
に置き換えて解釈する力が

落ちていると感じます。

寺島 確かに、人の話を聴く
態度や斟酌する理解力は弱
まったと思います。

杉本 一対一に慣れている
ことと関係するかもしれま
せんが、若い社員はそつなく
仕事をこなしても、周囲を巻
き込む力が弱い。これは仕事
が出来た人間でも同じです。

山河 自分が話せば、人は必
ず聴くものだと思います。い
るようです。「人は自分の
話など聴きやしない」という
認識も必要だと思います。

大沼 保護者にも一対一の
ニーズが強くなります。それ
を受けて成績表を保護者に
送付したり、個別に面談した
りする大学もあります。学校
教育は集団での指導が基本
だと思えますが、一対一の応
対をしないと、生き残れなく
なりつつあるのも現実です。

杉本 保護者の介入が増え
たのは、少子化の影響もある
のでしょうか。大学院を修了し
た新入社員でも、トラブルが

あると「一体、会社はどんな指導をしているのか」と保護者が出てきます。

石黒 それは教師の世界も同じです。新任教師の保護者が学校に来て「どういう新人教育をしているのか」と詰め寄る場面もあるようです。

寺島 今の生徒は、粘り強さという点にも課題を感じます。数学の定期考査では、難度の高い2割の問題を最初から解かない生徒がいます。大学入試であれば一つの戦術かもしれませんが……。壁にぶつかった時こそ乗り越えようとする気持ちを育て

たいところです。

石黒 教師が良かれと思っ
て厳しく教科指導を行うと、「自分は必要とされていない」と誤解して自信を失う生徒も目につきます。悔しさから奮起する気持ちが弱まっているのでしよう。知的飢餓体験がなくて、ハードルを下げて満腹感を味わうことに慣れていくんですね。これは、どの学力層の生徒にもいえることです。うそでも良いから「大丈夫だ」と言われて現状肯定したいという気持ちがあるようです。進路選択にも同じことがいえますね。

力的に映り、周囲に生徒が集まります。生徒はその辺りに非常に敏感です。

また、生徒の自立を考える時に忘れてはならないのが、学力中下位層への支援です。比較的単純な仕事が減り、ある程度勉強すれば、誰でも安定した職を得られる時代ではなくなりつつあります。今後、こうした層の生徒が自立した人生を送れるようにすることは、社会全体の課題だと思います。

寺島 生徒の学習状況に課題のある高校ほど、部活動の加入率は低い傾向にあります。元々の意欲の低さが関係しているのでしょう。

そうした生徒を変えるには、まず自信を持たせることが必要です。以前、就職する生徒が多い専門高校で数学を教えていた時、テストは教科書レベルの易しい問題に限定しました。それで80点くらい取れると、段々とやる気が出てくる。文化祭を自由に

企画させ、「学校のために役立つ」経験を持たせたりもしました。卒業後は就職し、やがて結婚して家庭に入る女子生徒が多かったため、「頑張れば何とか出来る」という自信を持って母親にな

ってほしかったからです。実際、中学時代に失われた自信を取り戻して卒業した生徒も多かったように思います。

楠本 企業も同様で、新入社員は基本的に褒めて育てます。仕事を任せて陰で支え、成功体験を積みませると、どんな意欲的になります。ただ、放っておいても出来る人はいませんが、全員がそうではありません。状況を見ながら

支援し、モチベーションを維持させることが大切です。

杉本 自分の価値観をしっかりと確立できていれば、自分の状況を把握して気持ちが揺れにくくなると思います。

小島 そうですね。特に高校生という多感な時期には、「自分の軸」を作ることを大切にしていた方がいいです。

私の場合、高校の先生が言っていた「One for all, all for one」という言葉が心に刻まれています。一人がいい加減だと、組織は成り立ちません。今の仕事でも組織力を大事にし、「みんな楽しそうに働いていますね」「目標に向けて団結していますね」とい

学校と社会をつなぐために

山河 自立とは、自分と社会との関係を自力で作れるようになることだと思います。高校では、そのような意味での自立を促す指導も大切にされています。

大沼 そうですね。例えば、

世界史の教師が少し勉強から離れ、歴史学習が社会とどうつながっているかを話すことが、自分と社会との関係を考えるきっかけになります。学習の動機付けにもなります。そういう話をする教師は魅



多感な時期には、「自分の軸」をつくることを大切にしてほしい

小島和真

った言葉を掛けられると、とてもうれしくなります。

大沼 社会が複雑化して生徒に求められるレベルが高まっていることを考えると、学校・家庭・社会が役割分担するのではなく、つながりを重視する必要もあるでしょう。「開かれた学校づくり」と盛んに言われますが、学校内に招くだけではなく、生徒が学校の外に出て、教師や保護者以外の社会人と接する機会がもっと必要だと感じます。

その際は、ぜひ教師も一緒に外に出ていただきたい。生徒とは違った視点で社会を見て、それを生徒に語ってあげることが出来ますから。

山河 地域や企業と協力し、そこで人々がどう生きているかを体感させてあげたいものですね。

杉本 自分の子どもの頃を振り返ると、近所の人から叱られる経験が多かった気がします。そうした役割も学校

に任されていると考えると、やはり学校だけに過度の期待があるのかもしれない。

我々もCSRに力を入れていますが、これまでは環境活動やNPO団体への支援などが中心でした。教育の重要性を考慮すると、もっと学校や地域社会に目を向ける必要があります。子どもに活動を通じた実体験があれば、詰め込み学習とは違い、「必要だからやる」と感じて、粘り強さが生まれるのかもしれない。

楠本 当社では某大学の付属高校の生徒を招き、仕事の体験談を話したりする取り組みを続けています。今後も

充実させていきたいと思えます。

寺島 職場体験できる生徒数が限られるなら、高校から直接社会に出る層を優先してほしいと思います。高校は社会とのつながりを感じさせる一方で、教科の魅力、学問の面白さをもっと伝える必要もあると感じます。

楠本 確かに企業に入ると一定量の教養が不可欠です。「もっと勉強すれば良かった」というのは、後から気づくものですが。例えば、最近文系の社員にも数学の発想が求められており、自主的に学ぶように啓蒙しています。



学校・家庭・社会が役割分担するのではなく、つながる必要がある

大沼敏美

小島 私も同意見です。日本史、特に現代につながる変革期である近代史の知識は、世界の中の日本を把握する上で重要ですから、諸先輩方は

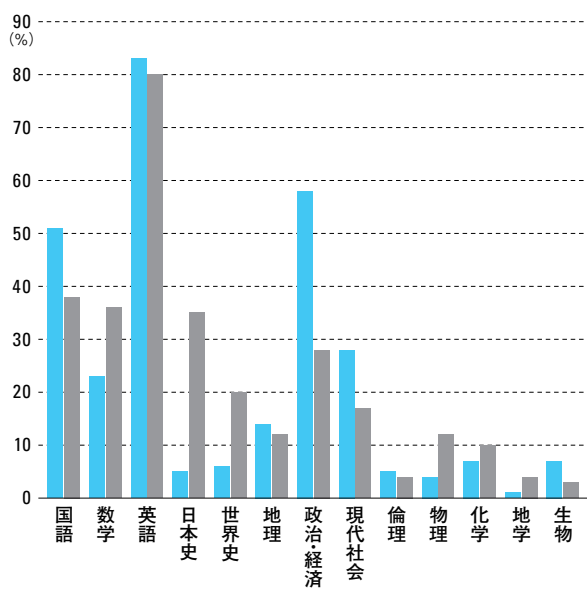
指導を強化してほしいですし、ベネッセが補完するという方法もあると思います。
杉本 私たちもこの一年間、一般教養を鍛え直す研修を行いました。グローバル化が進む中で外国人ともビジネスをする機会が増え、一般教

養は不可欠になっていくと感じますし、これから社会に出る人たちにとっては、更に重要になるはずですね。

寺島 高校の先生方が元気を失っている要因には、教科指導が受験目的でしかない

図1 教科に関するアンケート ベネッセ 2010年4月

■ 高校生「高校卒業後も役に立つと思う教科・科目を3つ選んで下さい」(高1~高3 回答人数=196)
■ 社会人「高校時代にもっと勉強しておけばよかった教科・科目を3つ選んで下さい」(25歳~49歳 回答人数=206)



これからの社会で求められる力

山河 社会で必要とされる

であろう力、そして今後の高校教育で特に大切にすべきことをお話しください。

大沼 生徒には学び続ける力とコミュニケーション力

の大切さを強調しています。そして、「しなやかさ」があれば何とかなると。

杉本 人生や仕事には、元々正解がありません。仕事では、正解のない中でもがき苦しみ、ひざを突き合わせて交渉し、方向性を見いだす作業の連続です。そこで必要とされる精神力の鍛錬も大切ではないでしょうか。

楠本 高校での手厚い支援を見聞きすると、深く感心する一方で、「それほど甘やかさなくても……」とも感じます。努力せず、後になって失敗に気づくことも、本人にとっては悪い経験ではないはず。これは少し厳しい発

想でしょうか。

小島 そのような教育に転換したら、マニュアル人間が減るかもしれません。

寺島 いつ、どのように自主性を育てるかは、高校教育の

永遠のテーマといえます。生徒の自主性が弱まりつつある中で、「やらされている勉強は勉強ではない」と、あくまでも自主性にこだわる教師もいます。その意見はもつ

ともですが、放っておけば大学受験に失敗する可能性が高い。基礎力がないから、浪人しても合格は期待できません。しかも、保護者の間で「面倒見の悪い高校」というレッテルを張られかねません。「本当は自立させたいのに手を離せない」という状況が、多くの高校が抱えるジレンマとご理解ください。

小島 高校に多くを求めるのは、生徒だけでなく、保護



教科の魅力、
学問の面白さを
もっと生徒に伝えたい

寺島 求

者も同じなのですか。

石黒 そういう側面はあります。「預けるから何とかしなさい」という意識の保護者も確かにいます。「朝食をとるよう」に指導して」という要望すらあるようです。

大沼 日本では学校が面倒を見なければ、教育格差が生じるといふ危惧もあります。家庭に経済力があれば、塾に通える。では、塾に通えない生徒の面倒は誰が見るのかという、学校にならざるを得ない。家庭に任せきりにするのは無理があるのです。

ただ、すべての高校が同じ方針である必要はないと考えます。自主性を重んじる高

校、面倒見の良い高校など、

いろいろあって良い。選択肢がたくさんあることは、生徒や保護者にとっても悪いことではないでしょう。

楠本 そうですね。日本では教育の選択肢があまりにも少ない。高校も大学も、偏差値で選ぶ生徒が大半です。企業では、いろいろな人の協働によって多様性に対応する必要がります。学校教育も選択肢を増やして多様な学びを提供する方が、社会的に有用な人材が育ち、結果的に自主性も芽生えるのではないのでしょうか。私たちが失敗したら大学、大学で失敗

したら社会でやり直せばいいという前向きな発想を応援したい気持ちです。

大沼 確かに「自分で選択して決められる」ということは、「自分が必要とされている」という感覚と共に、本人の幸せにつながる重要な要素だと思います。

寺島 そのような自主的な生徒を育てるには、再チャレンジが出来る環境も不可欠です。例えば、専門学校志望で教科学習をあまりしていない生徒が大学進学を希望した時、学び直しが出来るか

と言え、高校の固定されたカリキュラムの中では難しい。そういう時こそ、一対一の粘り強いサポートが求められますし、ベネッセによるサポートも意義が増すのではないのでしょうか。

山河 実際、学び直しの教材は好評です。「やれば出来る」ではなく、「やったら出来た」というコンセプトで、分かる喜びを伝えたいという気持



いつでもやり直せるという
前向きな発想を
応援したい

楠本銀次郎

ちで開発しました。これまで
進研ゼミは教科書対応を重
視していましたが、最近にな

り、「子どもをその気にさせ
る」ことが、より大切ではな
いかという視点で教材の見
直しを進めています。

大沼 厳密に言えば、「やつ
たら出来た、こともあった」
かもしれないね(笑)。大
人は、「やれば出来る」「夢は
かなう」と、軽々しく言っ
てはいけないと、私は思いま
す。厳しい言い方ですが、誰
でもやれば出来るわけでは
ない。それよりもプロセス重
視の考え方を大事にすべき
ではないでしょうか。

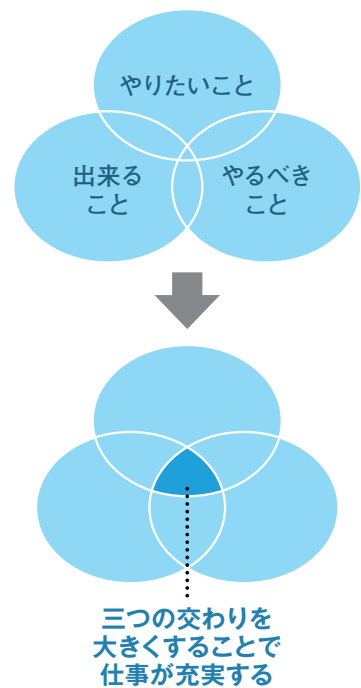
寺島 皆さんの企業は、プロ

セスではなく、結果重視でし
ようか。

楠本 そんなことはありません。
成果ばかりを見るので
はなく、協働作業がきちんと
出来ているか、指示の通りに
動いているか、また、前向き
にチャレンジし、やり抜いた
かといったプロセスも重視
します。

杉本 社会生活を充実させ
る上で、「やりたいこと」「や
るべきこと」「出来ること」
の三つを重視しています(図
2)。それぞれをバランス良
く広げて、三つの輪が交わる
部分を大きくしていくと、仕
事や生活が楽しくなります。
これは、学校生活に置き換え

図2 仕事のやりがいを大きくする方法



でも一緒だと思います。

大沼 私もこれと同じよう
なことを生徒に話していま
す。学校でいえば、やりたい
ことは志望校などの目標、や
るべきことは勉強、出来るこ
とは教科書力。「医学部に入
りたい」という目標だけ大き
くても、他の二つが不足して
いれば実現しません。

「出来ること」については、
トレーニングが必要でしょ
う。苦しい勉強や忍耐も求め
られます。

石黒 そうですね、英語が使
えるようになりたいなら、暗
唱、音読など地道なドリルの
蓄積は避けて通れません。

山河 部活動なら「レギュラ

ーになりたい」という目標が
あるから何回でも腹筋が出
来る。それが勉強になると、
すぐに放り投げてしまうの
はなぜでしょうか。
寺島 そこに教え方の工夫
が求められるのだと思いま
す。生徒の実態に応じて、本
質は変えずに、アプローチの
仕方を変える。それを教師全



「やれば出来る」から
「やったら出来た」

山河健二

員が心掛けるべきではない
でしょうか。
山河 目標に向けて耐える、
学び続ける、人の話にしか
り耳を傾ける……。先生方
が、こうした人間としての土
台が出来てこそ、教科書力が
伸びるといって考えで指導さ
れている様子が伝わってき
ました。企業の皆さんが示さ
れた、社会で求められる力と
方向性が一致しているとい
う感想も持ちました。今後も
教育現場と社会のつながり
を強化させ、生徒を学びに向
かわせる仕組みづくりに取り
組んでいければと考えま
す。本日はどうもありがとうございました。